



**East-Asian Network of Astronomy :
Research, Education and Popularization**

October 8-12, 2007 Fukuoka, JAPAN

EAMA7 シンポジウムのロゴ

ひろがる東アジアの天文学連携 国際会議 EAMA7 「East Asian Network of Astronomy: Research, Education and Popularization」を開催

海部 宣男 (放送大学, SOC chair) ・ 山岡 均 (九州大学, LOC chair)

東アジア天文学会議第7回シンポジウム (EAMA7) が、2007年10月8日から12日、福岡市および久留米市において成功裏に開催された¹⁾。EAMA7 組織委員会、東アジア中核天文台連合 (EACOA: 後述)、日本天文学会、天文学振興財団の共催で、福岡県青少年科学館、天文教育普及研究会、および福岡観光コンベンションビューローに後援をいただいた。関係各位に深く感謝する。

1. EAMA とは

EAMA: 東アジア天文学会議 (East Asia Meeting on Astronomy), 日中韓台4地域をコアとして、東アジアにおける天文学の連携・推進のため継続的に活動する、研究者レベルの組織である。1990年開催の「星形成シンポジウム」をきっかけに活動を始め、以来約3年に1回のシンポジウムを開催し (表1), それを軸にさまざまな連携事業

を進めてきた。日本での開催は1995年の東京以来、12年ぶり2度目である。

前回からの大きな進展として、2005年9月、EACOA: 東アジア中核天文台連合 (East Asia

表1 これまでの EAMA シンポジウム

第1回	1990年	黄山 (中国)
第2回	1992年	大田 (韓国)
第3回	1995年7月	東京 (日本)
第4回	1999年2月	昆明 (中国)
第5回	2001年11月	台北/太魯閣 (台湾)
第6回	2004年10月	ソウル (韓国)



写真1 国際会議場でのセッション風景.

Core Observatories Association) が創設されたことが挙げられる²⁾。これは前回の EAMA6 における議論と合意に基づくもので、中国科学院国家天文台 (NAOC, 中国), 自然科学研究機構国立天文台 (NAOJ, 日本), 韓国天文学宇宙科学研究所 (KASI, 韓国), 台湾中央研究院天文及天文物理研究所 (ASIAA, 台湾) の 4 カ所の中核的天文学研究機関を構成員とし, EAMA など研究者レベルでの東アジア連携や人員交流, 観測協力などを具体的に支援するものである。EACOA の創設でこれまで研究者レベルで進めてきた連携活動のバックアップ体制が整い, また将来の「東アジア天文台 (EAO)」設立の夢に向けても, 一歩が進んだ。

2. EAMA7 の特徴

これまでの EAMA シンポジウムは, 研究における協力・連携を中心においてきた。研究者どうしの交流という会の性格, 東アジアにおける天文学の状況からは自然なものであった。しかし世界天文年 2009 を控えて天文学における教育や普及, その東アジアでの連携の重要性が浮かび上がった。また研究協力の基盤が整ってきた現在, EAMA をベースとした協力体制を天文教育や普及にも広げていこうとの機運も高まってきた。そこで今回の EAMA7 は, シンポジウムタイトルを「East Asian Network of Astronomy: Research, Education and Popularization」と銘打ち, 研究・教育・普及における東アジア地域の協力体制について話し合うことを企図して, 国内の普及・教育関係者に広く呼びかけるとともに, 東南アジア諸国からも 10 名程度を招待することとした。

会場の選定も当初は福岡市国際会議場 (写真 1) のみでの開催を予定していたが, 教育・普及についての講演や討議には社会教育施設がふさわしいと考えた。そこで福岡市から車で 30 分ほど南の久留米市に位置する, 福岡県青少年科学館の協力を仰いだ。結果, 講演会場としてプラネタリウムドーム (写真 2) を終日無料で貸与していただく

など, 破格の対応をいただくことができた。

3. EAMA7 セッション

EAMA7 は 8 日のウェルカムドリンクを皮切りとし, 9 日からは以下 6 テーマでセッションが開かれた。講演数は口頭 80, ポスター 60 だった。

- I. Situation and Recent Progress of Regional Astronomical Research
- II. Highlights of Astronomical Research and Development
- III. Research Networks and Future Prospects
- IV. Research Networks in East Asia
- V. Network of Astronomical Education and Outreach
- VI. Future of Education and Popularization of Astronomy in EA

参加者総数は 130 名で, うち外国からは 50 名ほどであった。中国からの参加がビザの問題等で少数にとどまったのは残念だが, 多数の参加を得ることができ, それぞれの天文学研究・プロジェクトの格段の進歩が報告されたほか, EAMA を基盤とする盛んな連携活動 (東アジア VLBI, 2 m 望遠鏡連携プロジェクト, 東アジア若手会議, す

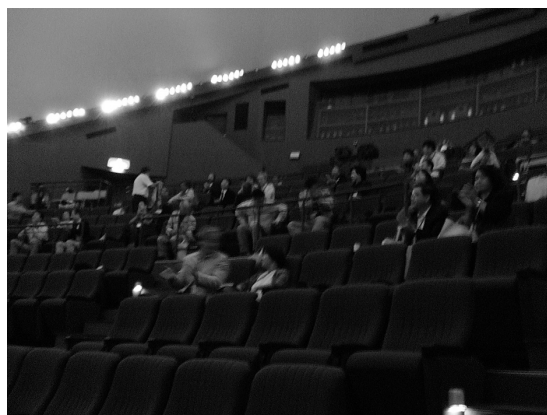


写真 2 プラネタリウムドームでのセッション。



写真3 ポスター会場でも議論が白熱した。



写真4 バンケットはホテルで盛大に開かれた。

ばる東アジアセミナー、ALMA 東アジアセンター、理論分野の連携、アジアジャーナルの状況など)が報告された。また多くの科学論文が報告・討議された。またコアの4地域に加えて、インドネシア、マレーシア、ベトナム、タイ、モンゴル、フィリピンからの参加者により、各国の研究の現状、普及や天文教育について報告と討論がなされた。注目すべきは、タイやマレーシアでの本格的天文学研究設備・組織の形成で、東アジアに続き、経済成長に伴って東南アジアでも新たな科学の芽吹きが始まっていることを深く実感したことは、収穫であった。また多くの天文教育・普及の現場からの参加があり、初めて東アジア(東南アジアを含む)における天文学の普及と教育の交流が広く議論されたことも大きい。

全体セッションに加え、VLBI ネットワークや世界天文年 2009 に関する小会合も開かれた。世界天文年会合には約 30 名が出席し、東アジアでの連携会議の開催などを決め、メーリングリストなど今後の協力へのステップが作られた。

4. これからの EAMA

EAMA7 シンポジウムは最終討論で、天文学の普及における東アジア連携の重要性、今後の EAMA シンポジウムでの教育・普及セッション

の設定、来年中国で開かれる IAU アジア太平洋地域会議で IYA 特別セッションをもつこと、などについて合意した。また日本の公開天文台の優れた活動も含め、人事交流と途上国支援の重要性を改めて強調した。

組織に関しては、次回シンポジウムまでの EAMA の運営を、新たに 4 地域からそれぞれ選ぶ EAMA8 の協同組織委員長に委任することなどを決め、次回の EAMA は、2010 年頃に中国で開催することとした。場所は、上海が検討されている。今回シンポジウムの集録は 2008 年夏に発行予定で、現在原稿を集めている最中である。

今回の EAMA7 から、新しい協力・新しいつながりがたくさん生まれた。それらが大きなネットワークとなり、世界天文年 2009 でのイベント協同開催などにつながることも、大いに期待される。将来の「東アジア天文台 (EAO)」への夢も含めて、EAMA の今後の発展が楽しみである。

参考文献

- 1) EAMA7 ホームページ
<http://www.naoj.org/Information/News/eama7/>
- 2) 天文台アストロ・トピックス (143)
http://www.nao.ac.jp/nao_topics/data/000143.html